
IS～インフィニット・ストラトス～ この戦いの向こうに、答えはあるのか

かめ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〈インフィニット・ストラトス〉 この戦いの向こうに、答えはあるのか

【Nコード】

N2592U

【作者名】

かめ

【あらすじ】

この作品は【白い閃光】の続編となっていますので予めご了承下さい。

いまだかつてないテロ危機に直面した全世界。目的が理解出来ないまま刻々と時だけが過ぎていく。……………そして一夏達も徐々にその渦中へと引きずり込まれてく。

作者はまだ未熟者なので表現がおかしかったり、もっとこうした方が
良いのでは?と思った方はどんどん感想を書いて下さいよろしく
お願いします。

0話 これまでのあらすじ（前書き）

この度は作者の勝手な都合で勝手に終わってしまい誠にすみません。
また心機一転して新しい気持ちで書かしてもらいますので最後まで
読んでくれると嬉しいです。

0話 これまでのあらすじ

初めまして俺の名前は織斑一夏。

この作品は【白い閃光】の続きになっているわけだから取り敢えず今までの事をザッと振り返ってみようと思う。

まずこの世界で重要なISから説明しようかな……………10年前篠ノ之束つまり俺のファースト幼なじみの篠ノ之箒の姉によって発表されたインフィニット・ストラトス通称IS、もともと宇宙空間の活動をもとに開発されたマルチフォームだったけど今はもっぱら地上兵器として開発している。

……………で俺は女性にしか使うことのできないISを唯一使うことができ一時期世界を驚かせた男だった……………んだが2人の男子、和泉亮平とシャルルデュノアがIS学園に転校してきた事でISが使える男は3人になったんだ。もちろん俺は驚きを隠せなかったし世界はそれ以上に驚いて世間では女性にしか扱えないと言う概念に不信を抱き人も少なくなっただんだ。

俺はすぐに2人と仲良くなって男同士3人で楽しく学園生活を満喫しようと思っていたんだが……………IS学園の女子達はもちろん2人を野放しにしておく筈もなく、教室ではクラスのはぼ毎日のように女子全員による質問責め、教室を出れば学年関係なくパパラッチ並みにしつこく後をつけ回されたいらしい。それで亮平は何かと俺に愚痴ってたことだけは良く覚えてる。確かに最初はきつかった。トイレと更衣室以外に学校で安全な場所はないし、授業に遅れたら遅れたらで俺の姉の織斑千冬こと織斑先生に地獄の制裁が待ってるし、最初あそこでゆっくりできる場所なんてなかったんだよな。

次の日もう1人ドイツの専用機持ちラウラボーデヴィヒが転校してきたんだがその軍人のような性格上、皆からは一歩引かれた存在だったし、俺も初対面でビンタ喰らったし、とにかく不思議な奴だった。

そして亮平もシャルルも学園に少し慣れて数週間たったある日重大な事が発覚した。大抵の事には慣れたと思った為もはや俺は笑うしかなかった。実はシャルルは男ではなく女で、本名はシャルロットデュノアと言うらしい。これだけでも大変な事だがここからが本番だった。

亮平は元リンクスとしてラインアークで傭兵として働いていた。リンクスとは、んゝゝ確かISが開発されたことによって世界の力の均衡が崩れてしまいテロや紛争、他国とのいざこざが相次いでいた。そこで登場したのが企業からネクストと呼ばれるISとその搭乗者リンクス……だった……はず。

………で……リンクスとは企業に雇われテロや紛争の防止、他企業のIS開発の情報収集、妨害など様々な事をやるらしい。要は金の為に企業に雇われISを動かすってことだな。

これは国と企業が秘匿していることで俺も最近になって知ったんだ。ついで言うともISの登場によって企業は国から隠れながら独自にISを開発していて、同時期にコジマ粒子と言う未知の物質をレイレナードって企業が発見した為ISの更なる進化の糧に使ったんだ。国は今もコジマ粒子の事は存在も知らず、企業だけの専売特許となっていた。

それから企業は国にはない力を手にし徐々に力を手にいれているって聞いたんだけど実際どうなんだろうな？

まあ俺達はそんなこんなな日々をそれなりに楽しく過ごしていたんだ。

そんなある日事件は起こった。

その日は学年別トーナメントの日だった。いわゆるISに乗って互いの力量を試す大会なんだが、そこにメルツェルとヴァオーと名乗る人物がISに乗って学園外から侵入。アリーナは外部からハッキングされて完全な密室状態にされアリーナはパニックになった生徒で溢れ返ってしまったんだ。俺はその時トーナメント戦でシャルルとパートナーを組んで幼なじみの箒とラウラで戦った直後でISのエネルギーがなく手も足も出ない状態だったんだけど、書類の都合で出場出来なかった亮平が助けに来てくれたんだ。

そこからは亮平が死ぬ気で戦ってくれたお陰ですぐに奴等も引き下がったから良かったけど、ISに乗ってたのが声のからしたら男ぽかったし色々謎の残る事件にだったんだよね。千冬姉に聞いてもすぐに話を濁すし結局何もわからないまま終わってたんだよ。

そしてそいつらが何者か知るのはすぐ後だった。

「To Nobles Welcome To The Earth」高貴なる人々よ地上へようこそ。

ORCA旅団と名乗るテロ集団が全世界に向けて発信した。これはクレイドルに住む人々への明確な宣戦布告だった。

あつヤベツ！！

クレイドルについて説明するの忘れてた。

えっと…クレイドルとは東さんがISを発表して企業がコジマ粒子を見つけてから数年後、国は企業が何か隠していると怪しんだため、このままではコジマ粒子の存在を国にばれてしまうと恐れた企業が一時的に協力し合い高度7000mに航空プラットホーム、クレイドルを作ることになったんだ。

クレイドルは国ではなく企業が管理しているため政府が勝手に調査を行う事は難しく、企業は安全にコジマ粒子による新たな開発場所を作ったんだ。

一応表向きには人類の新たな生活の場とか言って半分無理矢理載せたんだ。

数年たった今ではクレイドルも何十機かに増え人類の5分の1はそこで暮らしている。

だから企業はクレイドルを落とさせないために謎のテロ集団と戦う事になってしまったんだ。

そして夏。

一年生の初めての行事、臨海学校がやって来た。シャルロットが女という事で男子が2人になって何やら女子たちが益々騒ぎだがどうでも良かった。初日は俺も亮平達と皆それぞれ楽しんでいたが2日目には事態は一変した。

世界中の人々が躍起になって探しているIS開発第一任者篠ノ之束さんがやって来たんだ。驚いた事に俺も千冬姉も10年前から会っていないのに全く変わっていなかった。

そんなアインシュタインよりも有名な人物がなんで来たかって？

それは今日は妹、第の誕生日なんだ俺も一応買ってきたんだが束さんが持ってきたのは1機のIS、名前は紅椿。白式と同じく第四世代型のISらしいが詳しい事は何だかさっぱりだ

すっかり驚いた筈だったが突然ある命令が舞い込んだんだ。オームルと言う企業で1機の無人のISとAFの暴走を阻止。それがIS学園の上層部から命令されたんだ

ん~~~~とAFとは

アームズフォート

.....確か企業の軍力はコントロールをその第1の要件とし代替不能の個人に委ねるのは現に慎まれるべきであると考え、その結果として生まれたのが巨大兵器アームズ・フォート（AF）。

代替可能な多数の一般人で制御されハードウェアとして安定した戦力が約束される事実としてその戦力は平均的なネクストを遥かに凌いでいた。

そして作戦は俺、第がISの破壊。亮平、シャルロット、セシリアがAFの足止め。ラウラ、鈴は留守番と言う形で戦いが始まった。

繰り広げられる戦いは徐々に激しくなり一夏、亮平は意識不明、箒は戦闘不能。戦力は風前の灯火となり絶望となりながらも鈴やセシリア、シャルロット、ラウラは諦めず暴走したISに挑んで行きついにISを倒す事が出来た。

結局楽しめたのはISを倒してから観光旅行ぐらいだったんだよ。しかも亮平とシャルロットが何だか喧嘩したらしく帰りのバスで2人の間で怪しい空気が流れてたんだかなんだったんだろうな？

そしてこれからは夏休みなんだがその前にはテスト……………IS学園にもテストがあるんだな正直めんどくさいんだよな。

1話 和解案（前書き）

いまだ喧嘩をしている2人。このままでは不味いと思った一夏達は何とか仲直りさせようと考えているとラウラから思わぬ発案が！？

1話 和解案

いつもと変わらない昼。初夏の日差しが窓から射し込み部屋を暖かく包む、決して暑くはない程よい風が窓から入り食堂を程よく換気してくれて暑くもない、バランスがとれた室温だ。

変わったことと言えば今日は購買の激安特価の日で食堂にはほとんど誰もいなくちらほら人が見える程度だ。

だが織斑一夏の座っているテーブルだけは違った。一夏を中心として箒、鈴、セシリア、ラウラが座っていて異様に人口密度が高い。

亮平は今月厳しいとかで購買に逃げ込み、シャルロットは………わからん。

「ねえいつまであの2人は喧嘩してるのよ」

珍しく中華料理ではなくパスタを選んでいた鈴は皿に残っていた麺を右手で持つているフォークでくると遊び、左肘をテーブルにつけ頬を左手によしかからせながら言った。

「本人達は仲直りしたっていつてるが………」

「あれのどこが仲直りしてるのよ」

「確かに………」

2人はこの前の事件の中些細なことで喧嘩をしてしい、事件が解決した1週間後の今でも喧嘩をしている。2人に仲直りを提案したセシリアだったが2人は喧嘩なんてしていないの一点張り。だがそんな訳がなかった、教室では2人から流れる微妙なムードで染められ、さすがに気づいた山田先生が心配して一夏達に訪ねても来て事は2人が思っているよりも重大事件になりかけてた。現に教室はテスト期間も近づき緊張モードに拍車が掛かったり、時おりそのムードが箒や鈴やセシリアに伝染してしまい、度々一夏が被害者になるのも少くはない。当の本人達にその気がなくても迷惑このうえなかった。たがある唐変木はさっぱり会話の内容が理解できなかった。

「そうか亮平もシャルロットも普段通りだろ？」

「あんだね〜」

「一夏さんいくら何でも不謹慎過ぎますわ」

「??？」

どうやったらこの唐変木っぷりは治るのだろうか。

普段は気づかないくせに、余計な所で勘が鋭い。4人にとって本人に自覚がないのが余計に腹立たしく思っていた。だが今はそれを置いといて箒が話を戻した。

「どうしたものか……」

「でしたら今度の連休で2人の仲直りで全員つどこかに旅行に行きませんか？

「だとしたらどこか良い場所は……」

「ん……」

皆頭を抱え一生懸命考える。友達にここまでしてもらえとは、なんて素晴らしい友情だろうか。

様々な案が出るなか唯一話に参加しないで天ぷらそばを食べていたラウラが、ポケットから何かを取りだしテーブルに広げた。

「ならばここはどうだ」

「これって……」

クレイドル体験宿泊と大きく書かれ一同開いた口が閉じない状況だった。

どうやら企業事業の一貫で一般人に体験宿泊させてくれるらしい。2泊3日でお一人7000円なんと微妙なお値段だ

「ラウラお前1人で行くつもりだったのか」

「ああ一度内部を見ておきたくてな」

何に對してかわからないがラウラは自慢気に腕を組ながら答えた。

「まあ俺は良いと思うけど」

「私も構わないが」

「良いんじゃない」

「決まりですねでは一夏さん早速亮平さんを誘って来て下さいな」

「よしわかった！」

委員長の決断に一夏は急いで食事を平らげ、その場を後にした。一夏の背中を見送った筈、セシリア、鈴、ラウラは何故か互いに顔を近づけ小声で話し始めた。

「私達もシャルロットさんを誘いに行きますが、良いですか？今回は仲直りが目的ですから決して抜け駆けはしないよう」

「あんたには言われたくないわ！」

「なんですって？」

「我々が喧嘩をしてどうするほら行くぞシャルロットには早く機嫌を直して貰わねば……………」

ラウラの仲介で2人はにらみ合いを止めゆっくりと座り、椅子に深く腰を掛けた。それを見ていた篤はふとラウラの方を向みた。良く見えてみると、少しだけ彼女の目元に隈が出来ていた。

「やっぱり違うのか」

「そうだな部屋にいるときは常にため息しか聞こえてこないし、会話も全然続かないし結構落ち込んでいる雰囲気だな」

ラウラが愚痴をこぼすとは……………人の新たな一面に垣間見た篤だったが、それは事の重大さを表すようにも聞こえていた。

「たつく亮平も罪な男よね」

「まああの唐変木よりは幾分かはましだな」

「それは同感ですわ」

会話を終わらせ一同は、食事の食べ終わってなくなったトレイを持ち席を立った。彼女達はこの争いを何が何でも終わらせる必要があった。これから始まるテストの為に……

「おい亮平」

「一夏か………はどうしたんだ？」

ようやく亮平に追い付く事が出来た一夏はゼエゼエと息を切らし、亮平は一夏の回復をただまっていた。深く深呼吸をしてから亮平と向き合った。

「亮平実は週末に皆で旅行に行かないか？」

「わりの無理」

「えっ!？」

亮平の即断に驚きながら、一夏はまさか断られるとは思ってもいなかった為に予想外の展開だった。何故ならこの旅行は亮平とシャルロットがいて初めて成り立つからだ。

「駄目なのか？」

「どうしてもはずせない用事なんだ」

「そっか……………」

「じゃあな」

どうしたものか。できるものなら無理にでも連れていきたい。けど都合があるならしょうがないし、何より友達として無理強いは出来ない。亮平が見送ったので取り敢えず一夏は皆に報告しに戻った。

「え〜〜〜〜亮平これないの!!」

「鈴もうちよつと静かにしろよ。」

「えっ!？」

鈴は周りを見ると多くの視線が自分に集まっている事を知り顔や耳を真っ赤に染め慌てて座った。

「しかしどうする？シャルロットにも声を掛けてしまったし予約も入れてしまったぞ」

「まあ今回は純粹に旅行を楽しむんでも良いのでは？」

ピキーン！

一夏を除いた全員の脳裏に何かとてつもない衝撃がほとばしった。

（って事は……………上手く行けば一夏と2人きりで）

（楽しむ事も可能ってわけね……）

（だが………）

（上手く出し抜く必要がありますわね！）

各々が考えている事は完全に一緒に合ったため、全員が顔を合わせるとバチバチと電気が目から放たれ、臨界体勢に入っていた。嵐の真っ只中にある一夏は背筋をピンと伸ばし自分に被害が出ない様に影を薄めた。

（ハアーーなんだか、また大変になりそうだな）

はんば諦めかけた一夏の心など知らずに時間は刻々と過ぎて行きあっという間に週末になってしまった。

2話 予感的中（前書き）

結局亮平のいないままクレイドルに旅行に行った専用機持ち。クレイドルで買い物をしているところには亮平の姿が！

2話 予感的中

クレイドルそれは企業が新たに開発し一機あたり5000万から1億人ほどが住んでいる巨大プラットホーム。その巨大さ故にクレイドル同士の交流はなく別のクレイドルに行くには一回一回地上に降りる必要がある。表向きには新たな居住区としているが裏では国の監視から逃れ今でもコジマ粒子の研究がされている。

『ご搭乗の皆様誠にありがとうございます。当機はまもなくクレイドル25に到着いたします。お降りの際は忘れ物のないようにお願いします』

どこの飛行機も変わらないアナウンスが終わると、天井のシートベルト着用サインが光だした。

「うむそろそろか」

筈は8時間にも渡る空の旅を皆が寝ている中、彼女だけが一睡する事なく窓の外の景色を眺めていた。その訳は……………

「一夏そろそろ着くぞ」

一夏が隣に座っているからだ。

熾烈を極めた座席争いを筈は見事勝ち抜け一夏の隣を獲得したのだ。一夏は何事もなく皆と会話をしたりして楽しんでいるが、筈はあまりの緊張感から一夏が話しかけて来ても曖昧な返事しか出来なく一夏が眠ってようやく落ち着つく事が出来たのであった。

「んっ……………そうか」

ずっと座りっぱなしだったからだろうか、あまり寝た気がないらしく一夏は大きな欠伸をかいていた。まだぼやける意識をなんとか現実呼び戻し着陸に備えた。

「おーおすごく綺麗だなー」

筈の前に一夏が身を乗り出し外の景色を見始めた。確かに昇り始め太陽は目の前に有るのではと錯覚してしまう程にまで美しい。やがて飛行機はドック内に入港し美しい自然の景色から機械の箱庭に一変しもう見えない。

「綺麗だったな」

「ああ、そっそうだな」

飛行機はドック内に入港し景色を見終わった一夏はどけしまい筈は物寂しさを覚えてしまった。

クレイドルに到着し他の客は上から荷物を降ろし始めぞろぞろと飛行機から降りて行った。一夏も寝ていた鈴とセシリアを起こしてクレイドルを降りた。

「さてどうする？」

「取り敢えずお腹減ったから朝食を取りながら考えない？」

「そうだな。そうするか……」

ロビーに立ち尽くす4人は朝食を取りに行く事になる。朝という事もあってか空港のロビーは常に多くの人でこった返していた。大きな荷物は既にホテルに運ばれているので何処にでも行ける状態なので、そこら辺はひと安心。辺りを見回し空港の出口を探していると一夏の視界に見覚えのある人物を目にした。

「りよ……へ……い？」

亮平のような人物はすぐに人混みに消えてしまい見失ってしまった。

「一夏どうしたのよ？」

「ん？いや今亮平のような姿が…」

「んなわけないじゃない、それならなんで私達に何か連絡があるでしょう」

「それもそうだな」

一夏達は出口に向かって歩き始めたがシャルロットはまだ亮平のいたとされる場所を見ていた。

「シャルロットいくぞ」

「あ、うん」

タッタッタッタッタ

見間違いではなかった亮平はバックを持ちながら空港のロビーを出て別の場所に向かって廊下を歩いていたらある目的のために。

「和泉様でいらっしゃいますか？」

亮平が来るのを予めわかっていたかのように、黒のサングラスに白の背広を着ていた初老の男性が待っていた。

「そうだけど」

「どうぞこちらです」

亮平はそのまま男の言う通りについて行く事にした。

数日前一夏が亮平を誘う少し前、転校してから何回目にかなる織斑先生による呼び出しを亮平はくらっていた。しかも職員室出はなく会議室って言うのが、どうも嫌な予感がしてならなかった。

「失礼しまーす」

織斑先生は会議室らしい長い机に腰をかけ手に持っていた資料を眺めており。

亮平が来たのを確認するといつもと変わらぬ目付きでこちらを凝視した。

「来たか。……………実はお前に頼みたい事がある」

「と言うと？」

「クレイドルに行け」

「はあ！？」

どうせ面倒くさいことだと覚悟はしていたが、あまりにも唐突で亮平の頭では理解不可な状況で“何言ってるんだこの人？”そう言わんばかりの顔をしていた。当然の反応だが織斑先生は敢えて無視して話を続けた。

「先日こちらに試験運航中のクレイドル25が何者かに襲撃があると言う情報が企業連から来た」

企業連とはORCA旅団に対抗するために各企業が同盟を組んようになった。

国も一応加盟しているがほとんど企業が主導権を握っている。ちなみにIS学園は加盟していない。

「何者かって明らかにORCAの連中でしょ！って言うかなんで俺なんですか！」

「落ち着け馬鹿者ちゃんと説明してやる」

亮平が反論するのも無理はないが、織斑先生にとってはそんなことはどうでも良い、結局は亮平が行かせるのだから。

「企業がORCA旅団と全面的に戦うため企業連を発足したのは知っているな？」

「はい」

「だが実際はどの企業も国も自分の地域を守るので手一杯だ。しかも依頼があつたクレイドルはオーメルの管轄でな……………」

「ああこの前の事件の半分被害者の」

「そうだこの前、お前がISとAFを破壊したお陰でオーメルは疲

弊しきつている」

「なんで俺のせいなんですか！第一企業連に加盟していないIS学園がやらなくちゃならないんですか！」

「学園は今回のテロを利用して企業と秘密りにパイプを作ろうとしている。まあどうせ録でもないことのためだろうがな」

まあそんな事だろう。今のうちに貸しを作り、いざとなったら助けて貰う。あばよくばコジマ技術も手に入れるという魂胆だ。

「だからってなんで俺が……………」

「言つたる秘密りだと。その点ではお前は都合が良い、まあ安心しろちゃんと僚機を手配してある」

「いや。そう言う問題じゃなくて……………」

「頼んだぞ！」

（俺の考えは無視かよ？）

亮平は心の中で拳を硬く握り、出来ることなら殴り倒してしまいたいぐらいであった。

「何か言ったか？」

亮平の殺気に気づいた織斑先生も思いつきり亮平に向かって眼飛ばして来た。

「いえ。べつ別に！」

この人は一度決めた事を曲げないタイプだと、そしてそれは周りにも被害が及ぶということを再認識した和泉亮平であった。

「俺はパシリじゃないってのー！」

「どっ、どうかされましたか」

「え！？いえ、すみません」

案内してくれてる男性も落ち着きを取り戻し再び歩き始めた。どうやら亮平は無意識に声に出していたらしい。情けない自分を反省しながら後を歩いていった。

ガチャ

「ではこちらで暫くお待ち下さい。もう二方もすぐいらすと思います」

途中意味がわからなかったので、とっさの言葉に亮平は思わず聞き返してしまった。

「2人？」

「はい。こちらではそうなっています」

「まあ多い方が良いか……………」

亮平にとってはそんなもんだ。多ければこちらの被害は減るし、相手を分散できる。ようはこっちに迷惑をかけなければ僚機などだれでも良い。後にその僚機のせいで精神的に苦しめることを、今はまだ知らなかった。

「では失礼します」

ガチャ

亮平は手持ちバックをソファーに投げると辺りを物色し始めた。部屋には母なる大地を一望できる程の大きな窓。壁には暖炉に高そうな棚、その上にはこれまた高そうなる陶器の数々、とどめに鯨のよう大きな魚の標本だった。

「どうせ偽物だろ」

「……………本物らしいぞ、なんでもすでに絶滅した太古の魚って聞いたぞ」

ギクッ

いつの間に居たのだろう。亮平は入ってきた存在すら気づかなかった。

しかもつい最近聞いた事のある声がより一層亮平を際立たせ、ガクガク壊れた人形の如く振り向いた。

「ウインドにウォルコット……………」

「よお元気だったか？」

「お久しぶりです」

1人は目がややつり上がって年は亮平よりやや上、どこか織斑先生のような雰囲気をもち出していた。もう1人おしとやかそうどこぞかのお嬢様だ。亮平と年は変わらなそうだが、その異様な大人しさがより大人だたせている。

「はあ~~~~」

「なんだそのわざとらしいため息は」

「いや別に……………」

「そうか……………なら暇潰しに買い物にでも行くか」

「今は任務中なのになんでそうなるんだ」

「別に今すぐ来るって訳じゃないんだから」

「俺はパス」

「忘れたのか？お前に拒否権なんて無いぞ」

「え？.....あっ！！」

時が遡ること数日前、亮平は見失ったISシルバリオゴスペルを見つけるのをウィンドファンションにお願いし手伝ってもらったのだ。その時亮平はウィンドに何でもすると約束したのだ。

「そうだったあー！！！！」

これ以上にないくらい後悔の念に圧され地面に突っ伏してしまった。そのままうつ伏せに倒れた亮平の手を引いてウィンドは部屋を出た、ウォルコットもその後につき静かに部屋を後にした。

一夏達は朝食を取った後、早速お土産を買いに行ったのだった。そこはまるで地下街のような形でお店が広がっている状態だった。

「たつく」こ何もないわね」

「じゃあこれは何なんだよ！」

一夏の手元には沢山の袋がぶら下がっており、そのほとんどがセシリアと鈴の物で一夏自身は何も買っていないかった。

「鈴さんあなた一夏さんに持たせ過ぎではありませんか？」

「あんたこそどうなのよ自分は何も持たずに全部一夏に押し付けてるじゃない」

「あれは紳士としての務めですわ」

女性の楽しみである買い物になると彼女達の性格も変わって自分の買いたいを思う存分買っていた。

それ以外のシャルロットやラウラや箒は自制して慎重に物を選んで買っているが、それでも手に一杯袋を掲げている。

「はあ〜結局こうなるんだよな」

呆れてしまいがこれもいつものこと一夏には慣れ始めてきた。しかし逆にこんな事を慣れてくる自分が惨めで虚しく思えていた。

「このままじゃ一夏も大変だから一回ホテルに戻っかない？」

「それ賛成〜」

真っ先に賛同した一夏であったが、存在がいないかのように完璧に無視して女子だけで話しあっていた。

女性の買い物には男は蚊帳の外だと、やっと今日一夏はわかった。他の者はこのまま買い物を続けたかったらしいがシャルロットがどうにか皆を説得してくれたらしく、どうにかホテルに戻る目処がついた。

「じゃさつさと戻るわよ！」

鈴はまだ買っらしいが何をそんなに買うつもりなのだろうか。

一夏も皆の後について行こうと歩き出した瞬間、あまりにも突然にそれはやって来た。

「よし次行くぞ！」

「ってまだ買う気かよー!!」

「えっ!？」

どこか聞き覚えのある声。一夏は一刻も確認したいがために辺りをくまなく探しついに見つけた。

「亮平!!」

「え?い…一夏!？」

3話 緊急事態（前書き）

バツタリと遭遇してしまい、ウィンドとリリウム以外空いた口が閉じない状態だった。しかもセシリアはリリウムに対して一方的な怒りをぶつけて来た。

3話 緊急事態

亮平は2人の女性と一緒に高度7000mでショッピングをしていた。

1人は亮平より若干年上で少しだけ背が高い見た目からして気が強そうな人と、もう1人は亮平と身長が少し低く年は変わらないだろう、これまた見たまんまおしとやかそうな雰囲気をだす女性であった。

当の亮平は両手一杯に荷物をぶら下げて一緒に買い物と言うよりも下僕として従順しているようだ。俺も同じような物だから笑う事が出来ないが…

亮平も一夏もお互いに戸惑うしかなかった。

やっと第達も一夏がついて来ないのを不信に思い戻って来たところで亮平を発見した。

「亮平!？」

「亮平あんた何してんのよ!!」

「亮平さんあんまりですわ。友達の約束より女性との約束の方が大切なのですか？」

セシリアの目には亮平が両脇に女を抱え込んでいるように見えたのだろう。実際亮平は重い荷物を持たされておりウィンドとウォルコ

ツトが隣に立っているだけなのだが。

一夏は亮平の様子を見てただただドンマイと言っしかなかった。人の事は言えないが

「へ！？何のこと？」

「この後に及んでまだシラを切るつもりですか！..」

「いやいや全く意味がわからないんですけど！」

「そこまで愚か者だったとはな.....」

亮平に思いあたる節は1つだけしかなかった。数日前に一夏が尋ねて来たことだ。

（一夏が週末空いてるかって聞いたから無理って言ったはずだけど.....）

要するに一夏が正確に伝えなかった事が今回の事の発端だった。その一夏も自分が悪いとはいざ知らず、責められてる亮平を眺めていた。

「おい亮平誰だこいつら？」

「相手の名前を知りたいなら、まずご自分から名乗るべきではありませんか？」

「一体いつの時代だよそりゃ！」

「彼女の名前はセシリアオルコット。イギリスの代表候補生です」

「ん、知り合いか？」

「いえ、ですが存じ上げてます。同じイギリス人ですから」

「という事は……………あなたはリリウムオルコットですか？」

「知り合いなのかセシリア」

「実際に会うのは初めてですが噂はかねがね、企業に魂を売ったイギリス名門のウォルコット家ですわ」

「家を侮辱するのは許しません」

「事実でしてよ」

初対面にも関わらずどこか嫌な関係のセシリアとリリウム。

2人は静かににらみ合い互いを観察した。そんな雰囲気はまた

まさかセシリアがここまで噛みついてくるとは思ってもいなく、
— 夏や箒、鈴、シャルロットやラウラの全員が驚いてた。

尚も2人の視線はぶつかり合いバチバチと火花を散らしている。

とうとう焦れたウィンドが我慢しきれず話に割り込んで来た。

「リリウム話があるならここでも良いだろ？」

「はい」

「そつちも良いな？」

「……はい」

リリウムが視線を外しようやくにらみ合いが終わる。周りは緊張から解放され安堵の一時。

「そちらも構わないか？」

急に話しを振られた一夏はどう答えたら良いかわからず箒達を見るが、十分な返答は返ってこなかった。

亮平と話をしたかったので一夏は承諾をすることにした。

「ええ俺達は構いません」

こうして亮平との感動の再開？は後味悪く終了。

ウィンドの後に亮平やリリウムがついていったので一夏達も後に続いた。

（それにしてもセシリアの怒りよう尋常じゃなかったな。何かあったのか？）

「一夏良いのかついていつて？」箒は前の3人に聞こえないよう小声で一夏に話掛けてきた。

一夏が後ろを向くと鈴もシャルロットも怪訝そうな顔でこちらを見ている。セシリアとラウラはというと………セシリアはあからさまに不機嫌な表情で一番後ろを歩いており、ラウラは………どうやら先頭を歩いているウィンドを睨んでいるどうせ敵意を持ち警戒しているのだろう。しょうがないと言っべきか？

「亮平もいるし大丈夫だと思うぞ」

「そうか……………」

「それに…」

「？」

「なんで亮平がここにいいのかも知りたいしな」

「そうだな」

近くにあったレストランに足を運び、そこで一先ず状況整理が行われた。席は横からセシリア、鈴、箒、ラウラ、シャルロット。向かいに一夏、亮平、ウィンD、リリウムと上手くわだかまりが起きないようにした。

だが明らかに不自然な空気なため、店員も水を運んで来るさい手がカタカタと震えていた。敵同士の国々が今でも戦争を起こすかのように見えたのだろう。

「取り敢えずまず自己紹介だな。私はインテリオルユニオン所属のウィンDファンションだ。でこっちがBFF所属のリリウムウォルコットだ」

「どうも……………」

リリウムは小さくお辞儀をして挨拶をした。

（あの子も企業のリンクスなんだ……………）

「でそっちは？」

「あつ、俺の名前は織斑一夏です」

一夏を知らない奴などいるのだろうか？素朴な疑問が思い浮かぶが、そこは礼儀作法としておこつ。

「ああ良く知ってる千冬は元気か？」

ウィンDは飲んでいたコーヒーを置くと、少し笑いながら一夏に尋ねた。

「えっ、それなりに元気ですけど………知ってるんですか？」

「まあ窮地の間柄だ」

そこで話を終わらせまた、コーヒーを飲み始めたので一夏も紹介を続ける。

「でこっちからセシリアオルコット、鳳鈴音、篠ノ之箒、ラウラヴ
オーデビツヒ、シャルロットデュノアです」

「ふっ天才博士の妹にデュノア社の1人娘、ドイツ軍人か………
AFも落とせる戦力だな」

実際に落としたと言う事は敢えてスルーして口に出さなかった。

「でなんで亮平はここにいるんだ」

亮平は腕を組んで目を瞑りなんと説明したら良いか考えを巡らせていた。

「何者かに襲撃されるって情報が企業から学園に来て、護衛として俺が任せられたってわけだ」

これ以上ないぐらい簡単簡潔にまとめ上げ、考える時間が必要だったのだろうかここに座っていた全員が感じた。

「はあ〜そうだったのか」

「って言うかな、俺は一夏達が旅行に行くなんて知らなかったぞ」

カチャ

紅茶を飲んでいたセシリアが亮平の付け足した言葉にいち早く反応した。

「どういうことです一夏さんから何も聞いていないのですか？」

「俺はただ週末空いてるかって聞かれたから空いていないって答えただけけど」

埋まらなかった最後のパズルが埋まった。今回の事の発端が誰なのかハッキリした彼女達は一斉に一夏の方を向いた。“一夏〜！！”言葉に出さずとも目がそう訴えていた。

「ふむと言う事は一夏がすっかり亮平に説明しなかったのが原因か」

「へ？」

「たつくしっかりしなさいよ」

一夏に非難の声を浴びせようとした瞬間、携帯が鳴り皆が確認し始めた。一夏は“このまま何もなかったかのようにならないかな”などの淡い期待をしていた。

ピリリリリリリ

「ちよつとごめん」

亮平は電話に出るため席を一度抜けた。
そして一夏の期待は儚く散り皆から怒られ、それはどんどん酷くなっていた。

この状態をどうにか脱するため、一夏はわざとらしくウィンドに話

しかけ自分から意識を反らさせるようにした。

「ウインドさんは千冬姉とどこで知り合ったんっすか？」

作戦成功。

被害はピタリと止み、ウインドの方を向いていた。

「大した話じゃ無い。私と千冬は第一回のモンド・グロッソで優勝を争った仲だったただけだ」

国はその素性を隠すことも出来る。実際は自分の国の強さをアピールしたいためほとんど素性は明かされている。そのため準優勝が誰なのかわからずじまいだったため優勝者である織斑先生に目が向けられた。

「そうだったんですか」

歓喜に浸っている間にどうやら電話を終えた亮平が戻って来た。何やら眉間に深く皺を寄せながら。

「ウインド、リリウム」

亮平が手招きをして2人を呼ぶ。亮平の顔の表情からウィンDもリウムも勘づいたようだ。

「来たのか？」

「ああ」

「一夏ちよつと仕事行ってくる」

（亮平が………仕事？）

ガタン

ようやく亮平の言ってる主旨を理解出来た一夏は金を払わず店を出ていってしまった。

女子達も店を出ようとしたがこのままでは食い逃げになってしまうので、先に出ていった4人の分を払っていたら見失ってしまった。

息をひとつも荒げること無く走っていた亮平達がドック内に到着し中に入っていく。

ドックでは赤いランプが幾つも光り大勢の企業の役員がせわしなく動いていた。

艦内放送がされていないため、まだ一般人には知らされていないようだがそれも時間の問題だろう。

「企業の方々ですねすぐにでも出てください！5分後にはここに到着してしまいます！！」

「数は？」

「ハイ！3時と9時の方向から5機ずつであります」

「挟み撃ちにする気が……………」

「リリウムは待機私と亮平がそれぞれ相手にする」

ウィンドの判断に亮平もリリウムも最も効率が良いと考えていたし、この状況下でぐちぐち言い争いなどしたくもなかったため2人はすぐにISを展開させた。後に遅れてウィンドもISを展開させた。

「わかりました」

「わかった」

ドックのハッチがゆっくりと開けられ中の暖かい空気と入れ替わりで冷たい冷気が入り込んできた。

「亮平左は頼んだぞ」

ハッチが完全に開くと同時にウィンドが飛び出して行きすぐさま亮平も後を追う。

「おう」

リリウムが亮平達を見送る中、ようやく一夏がドックに到着した。

「亮平！！」

一夏はISを展開させリリウムの制止を振り切って飛んで行ってしまった。

嵐の前の静けさ（前書き）

え〜まず一言も長らくお待たせいたしました。

なんか久しぶりに書きたくなったので投稿してみました。

ころから書いていくつもりですので温かい目で見守っていて下さい。

嵐の前の静けさ

ドーナツ状の円卓を囲むように十数人の人物が腰を据えていた。辺りは薄暗くお互いの顔すら確認できないまるでわざと見せなくしているようにも見える。

その中の1人の男が部屋を満たすような大きな声で誰に問うでもなくに声を荒げて喋っていた。

「いつまでこんな茶番を続けるつもりだ！まだテロリストどもを倒せないのか！」

「奴らはISを所持しているのだ迂闊に攻め入ればこちらが返り討ちに合いかねんだろう」

もう1人の男が宥めるが彼の怒りが収まることなくより一層怒りを露にしていた。

「こちらわ既に試作段階のAFとISを失っているんだ！これ以上の損失を出すわけにはいかんのだよ」

「それは甘いセキュリティでハッキングされたそちらが悪いのではないかな？」

“くっ” 男は言い返す事が出来ず拳を強く握り座っているであろう奴を睨み付けることしか出来なかった。男の雰囲気を感じたのだから別の男が付け加えるように男に言い放った。

「しかもハッキングされた上、操られてしまう始末……あの時IS学園の助けがなければどうなっていたことか」

「よりによってあの学園の力を借りることになるとはな、とんだ失態だな」

「自分の尻は自分で拭くことは忘れるなよ」

「わ、わかっている!!」

もはや拳を握ることさえできないくらいまだに責められむきになっていた。

その時円卓の上座に座るリーダー格の男が割り込むかのように話に入ってきた。

「その辺にしておけ今はそんなことを言及している場合ではない」

リーダー格の男の発言力が強いのか今までいがみ合っていた連中は驚に首根っこを掴まれた兎のように黙ってしまった。その様子を確認しリーダー格の男が再び話し始めた。

「幸い主軸であるウルナ、カーパルス、クラニアムの3大アルテリア施設は健在だ。このアルテリア施設最大防衛拠点だ、これが奪取されれば我々の負けだ」

「逆に死守しければテロリストどもは十分なエネルギー供給も出来なくなりエーレンベルクも掃射出来なくなる」

その単語を聞いた周囲の人物は騒々しくなり、その周りが感じていた疑問を若い男が問い質した。

「エーレンベルクはあくまで噂に過ぎんだろ」

解答が返ってくるよりも早くリーダー格の男が動かした。

「レイレナードの遺産だろうが唯の噂だろうが奴らの狙いがエネルギーだとするならばそれを阻止するだけだ」

「ならばそれを利用してはどうでしょうか。」

話しを割り込まれたにも関わらず涼しげな顔で再び話を進めた。

「囿ですか……………」

「どうでしょうか？」

「……………良いだろ。それについてはまた後日」

そう言い終わると重い腰を上げて次々と退室していった。だがリーダー格の男だけが動かずに出ていく出口の一点だけを見据えてた。よく見るとリーダー格の男の後ろに2つの気配が存在している。闇闇に加え先ほどの集まりでは一言も発していないで本当にいるのかすら疑問に思われる。その闇の中と正反対のはっきりとした声がリーダーの男の元に届いた。

「奴らとて馬鹿ではあるまい。そうそう上手く行く筈がないだろう」

リーダーの男は振り向きもせず堂々とした声で疑問に答えてやった。

「そんな事は百も承知している。その為の策も……………」

「リンクスを囿に奴らを誘い込むつもりか……………」

「想像に任せよう」

その言葉を聞いたリーダーの男の口元が僅かにつりあがる様にも見えた。

同時刻

クレイドル

「二度と勝手な行動をするな」

「はい」

先程と同じ店だが先程とは違う席順、つまりラウラと一夏が場所を交代し丁度真ん中に来るように座らせられ、その一夏の向かいにはウインドが全てを見透かすような鋭い視線で一夏を貫いている状態であった。

と言うのも……前の戦いでの一夏の無断出撃についてである。戦闘事態には被害はなく無事に終わったのだがウインドは増援が来たり罠だったらどうなっていたかと言いたいのだ。リンクスと言う傭兵は殆どの場合が一匹狼で連携を取る方が寧ろ珍しい方なのだ。だから亮平とウインドは二手に別れ各個撃破をしていった。

もし増援や罠があったら、経験の乏しい一夏は敢えなく撃墜されていたかもしれないそれをおこっているのだ。

この近づきたい雰囲気のお陰で店員ははまだオーダーを聞けずに立ち往生しているはめになっていた。

さらに被害はこれだけに留まらず圧倒的な威圧感に臆してしまった
ラウラは気を紛らわすため汗ばんだ手で氷入りの冷たい水をちびち
び飲むしかなく、その水もとうとうなくなってしまった。

ラウラはこんな似たような感覚をどこかでも味わっていた気がして、
自分の記憶の中に逃げるように探し回りついに見つけた。あの感覚
は一夏の姉にしてクラス担任の織斑千冬が放っている感覚に似てい
たのだった。なんとか状況を打破する手立てを見つけたかに見えた
が敢えなく失敗してしまいただ一刻も早くこの時間が過ぎるのを祈
る事しか出来なかった。

そんな祈りが通じたのか5分後ようやく説教が終わりウインドが立
ち上がった。

「万が一またこんな事があれば命はないと思え」

彼女なら殺りかねない、確信とも言える何かがそこにはあった。

「じゃあ次からは断ってから行くようにします」

その言葉に筭、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラは空いた口が
塞がらず驚くと共にウインドは微かに笑っていたのだった。

「ではな亮平またあとで」

「おお」

先程までの雰囲気とは一変し上機嫌になったウインドは店の出口に
えと歩いていきリリウムもペコリと一礼して立ち去った。

「「ありがとうございます！！」」

カランカラン

「……………」

「……………」

「ゴクッゴクップツはっ」

慣れているのか、能天気なのか亮平だけが空気に馴染まずに豪快に水を飲み干していた。そんな亮平を若干羨ましいと思ってしまった一同である。

「あつ！すみません注文お願いします」

「よく食べる事ができますわね？」亮平は慌ててやって来た店員に色々と注文を言っている最中だった。

「もうなれたよ」

とある離れ島

「やっぱりあの程度なら瞬殺だろうな」

気候のせいかな部屋には風が吹いてもどこか温かみが含まれる風が入ってきている、そんな中男はパソコンを眺めながら意気揚々とした鼻声を歌いながらコーヒーを飲んでいた。

コンコン

「失礼します。自立型ネクスト現在最終調整に入りました。もう間もなく出撃できます」

「おう了解」

「……………」

「まだ何かようかい？」

いっこうに下がらない整備士に気が付いた男はコーヒーのお代わりをカップに注ぎながら尋ねた。

「……………本当にするんですかオールドキング様。」

コーヒーを飲もうとしていたオールドキングの手がピタリと止まり直立で立つ整備士の方へ振り向いた。あくまで表情は穏やかに。

「嫌かい？」

「すみません。そう言う訳では……………ですがこんな事をして本当にはいいんですか？」

「ぶっちゃけ言うとなテルミドールのやり方はぬるすぎるんだよ、あんな回りくどいやり方してたら成功するもんも失敗するんだよ」

ゴクッゴクッゴクッ

コトッ

「嫌ならやめてくれて構わないぜ」

「いえ私は一介の整備士でしかなく、あなたの指示に従っただけです」

「ふ、言い心掛けだ」

整備士は再び大きく敬礼をした後、またドックに戻って行った。

「さあ宴の始まりだ」

闇夜に蠢く者（前書き）

だんだん更新間隔が遅れてますね（笑）……………いや本当にすみません（泣）

実はもう次話が完成してるなんて口が裂けても言えませんが……………

……………ハッ！！だから（汗）

ではお楽しみください。

闇夜に蠢く者

「すっげー」

「おーおー」

「まあ見事な景色ですわ」

「わーすっごいきれー」

「きれー」

「見事だな」

ウインドとリリウムと別れた後、数多くはないクレイドルの観光名所を亮平はあちこち案内していた。一夏一同はそれぞれの感想を漏らしながら閉めに相応しいクレイドル最大にして最高の観光スポットの巨大展望デッキにやって来ていた。

朝方は霧雨が降っていたが午後には天気が回復して今眼下には白いわたあめのようにモコモコした雲、時折間から見える海、そして極めつけは何も覆い隠す事の出来ない青い空と眩しい太陽。正に絶景見たものを圧倒する見事な景色であった。

ここに来て妙にテンションが下がっている亮平を差し置いてみんなはすっかり景色を楽しんでいた。

「みんな飲み物何にする」

「じゃコーラ」

「私はお茶で」

「私もお茶」

「わたくしも紅茶で」

「僕も紅茶」

「私はコーヒー」

順に亮平、箒、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラが注文をし一夏は一つ下のフロアにあるレストランに向かって行き、亮平も後についていった。

店にたどり着いたが丁度昼食時にぶつかってしまったのだらうあまりの行列に呆気にとられながら渋々亮平と一夏は最後尾に並び待つことにした。

「なあ亮平まだ敵は襲って来るのか？」

「さあ……………」

「敵はORCA旅団なのか」

「ああたぶん……………」

半分無視をしている亮平を呆れた目でみながら一夏は順番が来るまでひたすら待つことにした。

けど亮平はそれどころではなかった。レストランに入る前にウインドに一通の暑い封筒を渡されていた。最初は気にならなかったが、メールではなく手渡しな事を考慮したら少し覗きたくなってしまっ

た。そこにはORCA旅団についての情報がみっちりと敷き詰められていた。何ゆえこんな大事な情報を渡してきたかわからないがそれなりの意思と覚悟があるに違いなかった。ラインアークを抜けてから幾度もなく企業からの勧誘があった。向こうは自分達の利益にしか興味がないかも知れないが現にORCAが学園を襲撃がするなど迷惑をかけていた、亮平自信そろそろ自分の身の振り方を考えるべきなのかもしれないがこの時すでに変更を許さない所まで事態は深刻化しており迷惑などを言っている場合ではなくなっていた。

夜の帳が降り闇が支配しはじめたさなかクレイドルは月光の抱擁を受け悠然と空を飛んでいた。夕食を終え寢床を探していた一夏達は亮平達と同じホテルで一泊する事にした。

亮平はスイートルーム的な豪勢な間取りの部屋で机に向かいながらホチキスで止められた分厚い資料に目を向けていた。だがその顔はどこか苛立ちを思わせるような顔つきであった。そしてとうとう我慢しきれずに立ち上がり後ろを振り向いた。

「なあなんでこの部屋にいるんだよ」

亮平の目の先には向かいに並べられたソファーに、それぞれ座り人生ゲームをしている一夏達の姿が……

「あつ！一夏あんた宝くじが当たって100000円貰えるって！」

「おっラッキー！！」

「まず人生ゲームを辞めろよ」

亮平のツツコミと一夏が100000を貰った事でようやく動きを止めた。

「俺は仕事してんだから他の部屋でやれば良いだろ！」

「私達が取った部屋は少々小さすぎるからなこの部屋が丁度よいのだ」

いくら真剣な表情で言われても無茶苦茶な理由でしかない、首をガツクリと下げながら亮平が追い出そうとするものの今度は鈴が口を挟んできた。

「それに亮平文字読んだけじゃん」

まるで子供の我が儘のような言い分であった。亮平は手に持っていた紙の資料をヒラヒラさせながら、大人な返答をした。

「俺は今の作戦についての情報やらなんやら確認しなきゃならない事があるの」

「ならそれを見せてくれませんか？」

「は？」

何故見せなきゃいけない理解に苦しむ亮平にセシリアは余裕な表情で立ち上がった。

「あら？もしかして作戦の資料と等と言っておきながら実は人に見せられないような卑猥な物ですか？」

その言葉を聞き亮平の元にさむい視線が一斉に飛んできた。
しかもそこで亮平がむきになって答えてしまったのが運のつきであった。

「あのなー作戦の資料を一般人に見せれる訳がないだろうが」

「なんだか精一杯言い訳しているようにしか聞こえませんか」

完っ全にセシリアのペースに持って行かれてしまいどうしようもない状態であった。

「まあ年頃の男子なんだからしょうがないんじゃないの」

さらに何故か鈴までが調子こいて参戦して来た。おい鈴お前そんなキャラだったのか！だがその攻撃はあたかも想像してしまった女子二名にも喰らってしまった。当の亮平は流石に堪忍袋の緒が切れそうになり一歩足を前に出した途端一番亮平との距離が近かったラウラは圧巻の手さばきで亮平から資料を奪い取ったのだ。

「あっ！」

「ふっ。良くそれで傭兵などやってこれたな」

「ナイスですわラウラさん」

ラウラはそのまま資料をセシリアにパスをした。呆れ果てた亮平は渋々取り返しに行こうとラウラの横を通り過ぎようとした瞬間、首筋に冷たいものが感じられた。

「簡単に通すと思うか」

あまりにも真剣そのもののラウラの表情を見てもは亮平には苦笑いする他なかったのだ。

取り上げた資料をセシリアはテーブルに広げ人生ゲームを中断させた、一番であった一夏はややかめつ面になるものと一緒に見ることにした。箒やシャルロットも卑猥な想像をしながらそっーと眺めてみた。

読み初めはそこそこ笑い話も聞こえたがページめくるごとに笑いは消え、とうとうページをめくる音だけとなってしまった。そこに書かれていた情報は今回の作戦について書かれた所もあったが、大部分はORCA旅団に関する機密事項目的、黒幕、資金源、リアナとの関係性などのすべての仮説が詳細なデータで表されていた。

しかもそこには篠ノ之束の名前も記されていた。

ラウラもその雰囲気の異常さを察して戦いを止めみんなの所へ流石軍人と言うべきか並べられた単語だけで大体の文面の理解に至った。取り上げたは良いが、まさかこんなにまで重要な事柄が記載されているとは思ってもいなく、悪い意味で裏切られた気分だった。

「はいはい子供が読むような物じゃないかなね」

資料を囲むように金縛りにあっていたが、亮平が資料を奪い返した所でようやく呪いが解けた。何か言い返そうと言葉を探すセシリアと鈴だがどうしようもない気持ちで一杯だった。

ガチャ

「亮平仕事だ」

「わかった」

部屋を出る前にもう一度一夏達に目をやったがあまりの落胆ぶりにため息をつき部屋を空けた。

友の決意

まだ公表されてはいないのだろうドック内と違い表通りは仕事帰りの人やカップルなどが行き来して緊急事態と言うことを忘れさせる程のんびりな時間が流れていた。

ドックを入って左手に見える個室にウインドと亮平は入っていく、表側とは違い舞台裏では技術者が世話しなく走り回っているのが伺えた。

「あいつら酷い顔だったが何かあったのか？」

一夏達の事を聞いているのだろう、亮平も素っ気ない態度を取ったためウインドも何かあったとすぐに察しそれ以上は聞いて来ようとはしなかった。

「偵察隊の情報ではおよそ30分で最終防衛ラインに到達します」

「敵の数は？」

「一機はアルゼブラ製のネクスト他は全てレイレナード製ネクスト計11機になっています」

「全てネクストか……厄介な奴等だな」

しかめっ面をしながらも敵に対抗するための策を思案をしているウインド。ORCAにはそれほどAMS適正が高い人間がいるのだろうか？どちらにしろネクストが11機その戦力を十分理解していたウインド、リリウム、亮平は真っ正面からの特攻のような考え方だけはしたくなかった。だが今回の目標はあくまで防衛戦。特攻まで

はいかないがちんたら戦う訳にもいかない

「しかも防衛戦かよ」

丁度そこに一夏、箒、セシリア、鈴、ラウラ、シャルロットが現れた。息をきらしながら肩で呼吸しているが表情は一夏の目には強い信念とた覚悟を抱いていた。

亮平が部屋を出て静粛さを取り戻し時計の秒針の刻む音が異様に大きく聞こえたていた。

何してんだか俺は……亮平の後を追うんじゃないのか？

自問自答を繰り返しているものの答えは返ってはこない。次敵が来たら共に戦うと誓っていたがあの時立つ事が出来なかった。行こうと行動を起こそうとすると足が震えてそれが全身に広がりやがて体中麻痺して声を出すことも出来なかった。

あれが亮平のいた世界……俺と一緒にいったって足手まといになるだけじゃないのか？

心のどこかでよぎった言葉を慌てて掻き消した。あれは本心なのかもしれない亮平が出ていって暫くするも後を追おうとは思わなかった。

何の為の白式だよ！を守る為の力じゃないのかよ！あいつがピンチなら無言で手を貸せば良いじゃないか。だれが何と言おうとも俺は亮平の友達だ。あいつが傭兵だろうが、この世界がなくなるうともそんなの関係ない！

決意した一夏は早かった、ソファから勢い良く立ち上がった両隣にいたセシリアと箒が驚いていたがそれには気づかなかった。

「行ってくる」

「ふっ、まったく世話の掛かる嫁だな。私も行くっ」

「わっ私もいきますわ?」

「へっ!? ちょっと待ちなさいよ!」

いまいち理解の出来ないセシリア、鈴、箒を残し亮平とラウラは部屋を後にした、慌てて後についていった箒達シャルロットが出たのは一番最後だった。

「何してるんだ部屋に戻ってろ」

「嫌です!!」

ウィンDの冷徹なまでの眼力に怯むことなく、頑として動かない一夏の態度に内心ハラハラ半場おろおろのリリウムとニヤケ顔の亮平それに一夏の後ろで見守る箒達一同。場は緊迫した空気のまま刻々と時間だけが過ぎてゆく。

「……………」

『ゴクッ』

「……………はぁ——」

勝負は意外と早く終わり折れたのはウインドであった。頭を掻きながら再び何かを考え始めた一夏の顔は安堵の表情に浸っていた。

「わかった作戦の参加は許そう正しこちらの指示には絶対に従って貰うこれが条件だ！」

「はい！」

急に話し掛けられたため多少声が裏返ってしまったがそれに負けないくらいの強い熱意が感じられた。

「作戦を説明するこっちに来い」

『はい！』

それぞれが大きな机を囲んだのを確認すると机の上のディスプレイがここら一帯の空域を写し出した。

「敵は11機のネクスト。2人1組となってこれを迎撃する」

2人1組と言う言葉に動揺を覚える女子たちがいた。

と言う事は一夏となる可能性も……いや白式は紅椿とは兄妹機見たいな者だあ確かにまだ絢爛舞踏は習得にまでは至っていないが、もし発動にできたら私たちに勝てるものなどいない！！

悪いけど私で決まりね。甲龍なら一夏と一緒に近・中距離お互いをカバーし合えるまさに絶好のパートナーね

ウィンDさんには感謝しなきゃいけませんわね。なんたつてわたくしセシリア・オルコットは一夏さんの苦手な遠距離は私の得意分野でしてよならば互いの苦手を補う観点からわたくしこそ相応しいですわ！

2人1組ならば私と嫁が組むに決まっているだろう、何故わざわざ言う必要があるのだ？

あゝゝゝもし亮平となつちやたりしたらどうしよう、亮平まだ怒っているよね？

などなど若干1名を除いた恋する乙女達は特権をフルに活用して、鼓動を早くさせながら期待に胸を膨らませていた。

「まず織斑とは……………」

『……………』

「箒だ」

「よし！よろしくな箒」

「あ、ああこちらよろしくな！」

嬉しさのあまりニヤケ顔が出てしまい、慌てて口に手を咳払いをした。鋭い視線が指すなどまったく気にしてる余裕などどこにもなかった。

納得いかないは！

納得いきませんわ！

何故私と嫁を引き離すなどどうかしているぞ

次の組を言おうとしたウインドの口が一旦閉じ心中でもう抗議したセシリアと鈴、ラウラに目をやった。

「何だ文句があるのか？」

「『いえ………』」

「続いて鳳とラウラ。セシリアとリリウム。シャルロットと亮平以上だ」

組を発表し終わるとやや不満に思う人達がややいる事など完璧に無視してウインドは話を進めた。

「追い討ちはするなこれはあくまでも防衛戦だと言う事を忘れるな！」

「？ウインドは誰と組むんだ？」

「私は1人で十分だ」

「ああ成る程」

ウインドならば大丈夫だと確証のない確かが亮平を納得させた。ウインドは他の質問が無いことを確認した。

「5分後1番ハッチに集合、各自準備を怠るなよ！」

そう言い終えウインドは部屋を出ていく。それに続きリリウムも部屋を出ようとセシリアの横を抜けようとすると

「精々私の邪魔だけはなさいませんようにリリウム・ウォルコットさん」

憎まれ口を叩きながら不敵な笑みを送りリリウムに視線を向けていた。対するリリウムも僅かにピクツと反応し微笑みながら振り返ると

「チームになった以上は仕方ありません。あなたが負ってしまつたミスはこのリリウムがカバーして上げます」

リリウム途中まで良いこと行っていたのになんで最後セシリアの勘に触るようなこと言うんだよ。よっぽど家を侮辱された事が許せなかったのだろう

そんな亮平の心の呟きも聞こえずリリウムはみんなに一礼をして部屋を去ってしまった。

リリウムは歩きながら独りばやきながら一番ハツチに足を進めていた。その足取りはどこか残念がつているようにも伺えた。

最後に会ったのはいつのことだろうとリリウムは過去を振り返っていた。

確か2年前のあの依頼が最後でしたね……感謝してもしきれません。リリウムはいつか必ず恩返しさせていただきます。

2年前とある施設の破壊をリリウムと亮平が共同で行っていた。相手企業は死守する事を断念してリリウムと亮平を捲き込みでの自爆を図ったのだ。その時リリウムは罠に引っ掛かり負傷し動けない状態だった。死を悟つたリリウムだったが亮平に助けられ間一髪生還する事が出来た。その時亮平に恩義と好意を持ったのだった。

「もし亮平さんだったら……お役に立つこと出来ましたが」

はあ〜

「悪いな今回は譲れないんだよ」

「ヒヤッ!! ウィンドさん!？」

我ながらおかしな声を出してしまったと顔を赤くさせながら後ろにいるウィンドの方を振り向き弁解に至った。

「い、いえ。わ、私は別に!」

「いや、いや私は何も聞かなかったぞ」

リリウムの肩をポンポンと軽く叩くとクスクスと声を殺しながらウィンドは先に歩いて行ってしまった、その後を目で追うリリウムの顔はまだ紅潮していた。

「良し揃ったな」

各々のISスーツを見に纏いながらウィンドの前で横一列で並んでいた。そして全員の体がそれぞれ白い光球に包まれたかと思うとすぐに光は消えISを装着状態になり準備が完了した。

「良し行くぞ！」

ガコン！！

ハッチがゆつくりと開くと気圧の違いで体が多少持っただけそうになったものの、なんとか持ちこたえ完全に開ききった所で、ワインDを先頭に次々と大空に飛び出して行った。

戦う意味

護衛対象である5機のクレイドル。一夏、箒。シャルロットと亮平。リリウムとセシリア。ラウラと鈴の組みは横一列で最終防衛ラインより少し前で待機、そしてウインドはみんなの400m程前で1人待機何故かと言うと敵はクレイドルの進行方向からくる事はわかっているが奇襲や陽動を考え2人1組500m間隔でクレイドルの前を待機させるのが良いと判断。もはや隣の組が米粒ほどの大きさであつた。

昼間と違い空高くからは三日月と星たちがきらびやかに輝き与え、下では雨が降っているだろうふ厚い雲が空からの光をあたたかく跳ね返し真夜中にも関わらず明るく雲の上は幻想的な風景が見えてた。だがクレイドルの滞空高度は7000m気温は地上に比べグッと下がりがさらにそこで吹く強風は肌に痛々と刺さり寒さに更なる追い討ちをかけてきていた。

そして一夏の隣にいた箒は震えていた。単なる寒いと言うものではない。これから始まる戦い1億人も一般人を守るプレッシャー、そのために相手を倒すと言うこと。この高度ではエネルギーを切れた時点で死ぬ文字通り命懸けを意味している。

今年の春にIS学園に入学して偶然にも一夏と再会し、これからも楽しい毎日を過ごして行くつもりなのだ。そう思うと無意識に手が震えていた。それを悟られまいとより強く雨月と空裂を握りしめた。

「大丈夫だ箒は俺が守つてやる」

「一夏」

突然の一夏の言葉。だがその言葉にはどこか安らぎとも言える何か

があつた。日頃は鈍く鈍感で妙な所で気転が利く性格に翻弄されている筈たちだったが、こういう状況ではとても安心感を覚え筈は肩の力を落とした。

まったくこいつは……………ありがとう一夏。もしお前がピンチになった時は私が全力で守ってみせる！！

「亮平こんな時に言うのもあれなんだけどこの前のことごめんね」

一夏、筈組の右隣に位置しさらに右にはセシリア、リリウム組の姿がポツンと見える。500m前方にはウインドが1人佇んでいる。

亮平はシャルロットの右斜め前およそ2mで待機。

何故一緒の組になってしまったのだろうか……………亮平とは2週間ほどともに話もしていない。そんなことで作戦に支障が出てくるので、戸惑いながらもシャルロットは勇気を出して亮平に話しかけた。こんな時だからこそ言わなきゃならなかったのだろう少なくとも1億人もの人命を守る身として些細な喧嘩で危険にさらしたくないと言うシャルロットの意思なのだろう。

「喧嘩の真意はともかく俺は任務にまで私情を持ち込む気はない、それともシャルロットはそれすらも信用してないのか」

「い、いや！そう言うわけじゃないけど……………」

「来たぞ！」

シャルロットの弁解を無視して無線から飛び込んだウインドの声、

この時初めてシャルロットは自分が失敗してしまったと理解した。前方に目を向けると、僅かに光る点がこちらに向かっていた。だが圧倒的に少ない数えてみると光は2つしか見当たらない。敵は11機いるのではないのか？全員の頭に疑問がよぎったに違いない。

「全員まだ動くな指示をまて」

最大望遠にズームしウインドが確認した。1つはオールドキングの操るリザ。全身が緑色でコーティングされたアルゼブラの機体、パツと見バツタ見たいだった。もう1機はレイレナード製のネクストアリーヤ。今はなきレイレナードの遺産。何年も前に製造された機体だが未だにトップを争うのに相応しい性能を持っている。再び造り出すのは不可能と言われ現存しているので全てなのだ。それを11機も保有していたとするならばORCAはどれ程の財力を有しているのだろうか……やはりどこかの企業と繋がっている可能性が有力だろう。

そのネクストからチカチカと光が途切れ途切れに送られてきた。

「光信号？交渉でもするつもりか！？」

「交渉？乗る気か？」

「相手の出方を待つ暫くそのままだ」

「これはこれはお初にお目にかかれて光栄です。ウイン・D・ファシオン殿」

「そう言う貴様は反抗勢力リリアナのリーダーオールドキングか……」

台本をうる覚えしたかのようなオールドキングの挨拶を軽くないなしすが1人の男の素性はハッキリとした。だが後ろにピクリとも動かず佇むアリーヤは全身が装甲に覆われ顔はバイザーで完全に隠れ性別を確認するけどもできない、まるで次の命令を待つロボットのようだった。

「挨拶も済んだことだし本題に入ろうか」

わざとらしく大きく咳をしたオールドキング、余裕の態度を見せてる辺り、それなりの力をもっているのか？

「あーあれだもし通してくれるなら命だけは助けてやる」

「もし断るなら？」

「まあ取り敢えず殺すか」

眉をピクリとも動かさずウインドはその返答に黙ってしまった。その会話を介して無線で聞いていた一夏たちも固唾を飲んで聞いている。すると考えていたウインドの口が僅かにつり上がった。

「ならこんな提案はどうだお前らが大人しく捕まえられるならば五体満足で生かしてやろう」

「拒否したら？」

「取り敢えず半殺しだ」

その言葉を聞いたオールドキングは大きな声を上げて笑い始めた。

夜空には他の音などなく、声だけがより一層大きく聞こえてくる。それは無線を通してもなく聞こえ、一夏たちにこの上ない不愉快が襲った。

「ハハハハ！浮かんでいるだけの物体を破壊してもつまんないかな、ネクストが来るのを予想して正解だった！！しかも9人！最高のショーじゃないか！」

もはや言っている事がまともではない。その常識を逸している言葉を聞き、セシリアや鈴や箒は身震いを覚え、一夏はどこか憤りを感じていた。

「お前は狂ってる」

ウインドの操るレイテルパッシュを、全速力でリザにハイレーザーライフルを撃ちながら突進していく。

「この世界が狂ってるんだよ！！だから俺みたいなのが生まれるんだよ！」

鼻で笑いながらオールドキングが難なくレーザーを避け空中を飛び回っていた。まるでこの戦いを楽しんでいるようだった。

「貴様は行き過ぎている！！」

「そうかものだが今はこの戦いを楽しもうぜ！」

機動性はレイテルパッシュの方が上だがアルゼブラ特有の高旋回性は空中で真の力を発揮しておりリザによるショットガンとライフルを併用攻撃はレイテルパッシュのPAを剥こうとしていく。

リザはEN兵器にレイテルパツシュは実弾兵器を弱点としており、お互い迂闊に手を出さず様子見の状態だった。その様子見てウインドは1つわかった事がある無駄な口を叩く割に動きに無駄はなく、流石でリリアナのリーダーとしているのも頷ける。

「お仲間もそろそろ暇になって来たんじゃないか？」

「何？」

グウン！

突然アリーの目が光、同時にウインドに向かって襲い掛かってきた。それらはあちらでも動き出したようだった。どうやら雲の中に隠れていたらしい。

「な、何なんだ！！」

「簾下がれ！」

一夏と簾の元に雲から姿を現した2体のアリーヤ。それは漆黒の黒でコーティングされ月光の光が反射して赤眼が異様な輝きを発していた。

2体は一番距離の近かった簾に飛んできた。

一夏の命じられたまま一旦下がり距離をとろうとしたがアリーヤはOBとQBで一気に近づき身の丈以上ある巨大なレーザーブレードを簾に向かって斬りかかった。なんとか雨月と空裂を交わらせ受け

きるが力が強すぎて身動きが取れなくなってしまった。もう一体が身動きの取れない筈の後ろに回り込んでしまった。

「うおおお!!」

間一髪。一夏は筈とアリーヤの間に滑り込み、一連の動作で右手に持つ零落白夜で巨大なブレードを受け流し左手に装備されている雪羅でゼロ距離砲撃をして吹き飛ばしてやった。

「やったか……」

頭から落ちていくアリーヤはスラスタ制御で体を半回転して起き上がった。だがどこことなく不自然な機体制御に、よく見ると右足が力をなくしてただぶら下がっているだけだった。どうやら右足の動力部分が破壊されているのだろう。

「よし!」

そして鈴とラウラもアリーヤ2機と戦っていた。

「鳳動きを止めてくれ!」

「りょーかい!!」

連結されている双天牙月でつばぜり合いをしていた鈴は肩に装備されている龍砲が頭に狙いを定め派手に火を吹いた。近距離で放たれた龍砲は少し軌道がそれたもののアリーヤの両肩の装甲は無惨にも

吹き飛び衝撃に体制を崩していた。ラウラはそれを見逃さずにシュバルツ・レーゲンのレールガンを放つ。PAによって少しは相殺したものの、PA貫通力が凄まじくアリーの機体を撃ち碎いた。鈴は直ぐ様、もう1体葬りさるうとハイパーセンサーで目標を探す。するとつい今しがた向いていた後方からハイパーセンサーの警告音が耳に響き、咄嗟にイグニッションブーストで左に回避。鈴が今いた場所ではアリーのブレードが横一閃に薙ぎ払われてた。

「何死んだんじゃないの!？」

振り向いた先にはアリーの左上半身がレールガンにより吹き飛ばされ、至るところで電気が放電し、形成してるPAが濃くなったり、薄くなったりまるで呼吸をしているような姿があった。

「なに、これ……」

啞然としている鈴の前で半壊しているアリーの再起動して一直線に鈴に向かってQBを吹かしてた。鈴がそれが無人機と理解したのは目の前に迫り来るアリーのコアが露出し導線などがバチバチと火花を散らしている時であった。

「鳳!！」

咄嗟のラウラのAICによって、損傷したアリーの動きを止め難とか鈴を危機一髪で助ける事が出来た。

「ボツさとするな!」

「うん、ごめん」

続けて迫りくるもう1体を今度は気をしっかりと持ち、相手を正確に捉えて双天牙月を大きく振り回した。

たつくあんなことで驚くなんて私もまだまだね。

そんなことを思いながら鈴は龍砲と双天牙月を切り離し連続した攻撃で匠な技を繰り返していった。

セシリア・リリウム

「ああ！もうあのバリア面倒くさいですわ！！」

セシリアのビームライフルではPAの影響で攻撃力が大幅減衰してしまい致命傷を与えられずじり貧状態だった。こちらも2機のアーヤの襲来に対処している真つ最中。ただ一夏たちや鈴たちと違い連携をとろうとは思わず（主にセシリアの判断）手を出して来ないで状態だった。リリウムはそこそこの戦いをしていたが、セシリアのブルーティアーズにはビーム兵器以外にはなく、ただただエネルギーと時間を消費していくだけだった。それでもリリウムに助けを求めないのは家を重んじるセシリアのプライドがそうさせているのかもしれない。このままでは私が負けるのも時間の問題……………でしたらPA発生範囲より内側で攻撃すればいいのではなくて？セシリアは一度亮平にPAについて聞いた事があった。半永久的にエネルギーを生成出来るが一度PAが切れると再度生成するのにある程度の時間が掛かる。それに頼る余り他の防御はおろそかになった。さらにPAは自分を球状に囲み死角のない防御膜を張るがゼロ距離になると他の物質が干渉してしまい上手く整波できないとの事だった。

今のセシリアにPAを剥ぐだけの攻撃力はない。残された選択肢それはつまりゼロ距離での攻撃。近づく分リスクも高まるがセシリアにはそれ以外の考えは思いつかなかった。

「行きますわ！」

一度大きな深呼吸をしたセシリアはアリーヤの左腕に装備されているレーザーライフルの雨を掻い潜り敵の懐へ飛び込んでくる。アリーヤも右のレーザーブレードを出現させてまっすぐ突っ込んでくるセシリアにカウンターを決めようと距離を合わせながらセシリアの腹に向かって勢い良く突いた。幅が1m長さが2m程あるブレードを僅かな小動作で右に体をくねらせ避ける。数センチすれすれで通るエネルギーの塊とも言うべきブレードから放出される熱に、やや顔を曇らせながらもアリーヤと1mほどの距離まで接近することに成功した。構えたスターライトMK-?を顔面へと銃口を向ける。

「速やかに武装を解除しなさい」

相手のPAの展開域の内側に侵入していることで息を切らし笑みを浮かべながらも多少は余裕も出てきた。しかしセシリアの警告を無視した?いや受け入れると言う命令がないアリーヤはレーザーライフルをセシリアに向け自分の肉体をかえりみず撃ってきた。肉を切って骨を断つ。ビットをわざとレーザーライフルに当てて防ぎつつ残り3つのビットでアリーヤに一斉発射。続けてスターライトMK-?を連射、離れ際にミサイルビットこの卓逸された一連の動作で止めを刺す事に成功。どうにか倒す事が出来たISと違いネクストには絶対防御がなくPA以外に身を守る術がないためアリーヤは全壊を免れなかった。爆発し部品が母なる大地に降り注ぐ中、セシリアはようやくあれが無人機だとわかった。

「無人機でしたか……それよりリリウムさんいかがかしら、まあこのセシリア・オルコット懇願でもするのでしたら助けて上げないこともありませんわ！」

皮肉めいた言葉を口にしながらリリウムが戦つてると思われる場所に視線を移した。

「それには及びません。あなたより早く倒しましたから」

ゲッ！！イギリス代表候補生のセシリア・オルコットとは思えない言葉使い。それもそのはずセシリアの目の前に噂のリリウムがいたのだから。

「いたのですが、てつきり死んだのかと思つてしまいましたわ」

「それには心配に及びません。私はあなたより長くこの世界にいますから、少なくともあなたより先に死にはしません。どうかご安心ください」

ピキッ！！

セシリアの額の血管が切れたようにも見えたが気のせいかな？セシリアは殺意のような邪念のような視線をリリウムに向けた。どうしてセシリアには敵が多いのだろうか……まあ彼女の皮肉たつぷりの発言からだと言うのは明確のように見えるが……

「ママ！お空がピカピカ光っているよ！」

「こら！窓から離れなさい」

子供は親に腕を引っ張られながら名残惜しそうに窓の外を見ていた。よく見たら帰宅途中の人達数名も窓の外を見ている。その方向は現在戦闘が行われている方向。戦闘の事は一切発表されていない。だが外の状況を気づいてる者も少なくはない。あのまばらに光る爆発を見たクレイドルの住人は徐々に理解していった。

あれは何の為にしている戦闘なのか、相手がORCA旅団だということ、そしてクレイドルと言う場所は非常に脆く、不安定な場所であること、そんな歩くのもおぼつかない足場に人々はやっと気づき恐怖していった。

戦闘開始から20分が経過。尚も激しい戦いが続く、この戦いの結果が後のORCA旅団との戦いに影響が生まれるのは間違いがない。

そしてクレイドルの住人以外にもあの戦闘を見つめる者たちがここにいた。

「オールドキングが無断で自律ネクストを使用して戦闘をしているのか」

「メルツエルか……………」

ディスプレイを眺めているテルミドールはメルツエルの来訪に返事だけ。メルツエルもそのまま話を進めた。

「我々の目的は人殺しではない、あいつはやり過ぎてる」

「奴にもけじめはつけさせる。それに我々も企業の返事次第では人殺しになってしまうがな」

「だがあいつは殺戮を楽しんでいるだけだ」

ディスプレイを閉じやつとメルツエルと目を合わせたテルミドール。いつもの表情とはどこか違いどこか楽しい部分が含まれてる。「安心しろあつちにはウイン・D・ファンションがいるそう簡単にはやられないだろう。それよりもあと少しで3ヶ所すべてのエーレンベルクの設置が終わる。残る問題はエネルギーだけだ」

「残るアルテリア施設はカーパルス、ウルナ、クラニウム、B7、スフィアのみとなった」

「いよいよ計画は最終段階だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2592u/>

IS～インフィニット・ストラトス～ この戦いの向こうに、答えはあるのか

2012年1月5日19時50分発行